

姉さま遊びの原義

武笠俊一

【要約】

柳田国男のママゴトの分類は精緻で優れたものであるが、いままで研究者には無視されてきた。本稿は、柳田のママゴト研究の再評価を行なうとともに、その問題点につき新しい見解を示そうとするものである。

柳田は、他の伝承遊び研究と同じく、ママゴトについても神事起源説を提起した。しかし、彼がその最大の拠り所とした、〈年かさの少女たちによる戸外での炊事飲食の慣習は神事に由来する〉という命題には疑問の余地がある。この問題をさらに深める手がかりの一つとして、本稿では、「姉さま遊び」の原義を探ることによって、柳田の伝承遊び研究における神事起源説の当否を問題にしたい。

一 課 題

柳田国男は民俗学ほとんどすべての分野を開拓した巨大な先駆者であったが、伝承遊びの分野の研究については必ずしも本気で取り組んだ訳ではなかった。そのため、この領域における彼の研究には相互矛盾している主張や、検討不足の点がまま見られる。その原因のひとつとして、彼が遊びと信仰の結びつきを重視しすぎたことが挙げられると思う。こうした視点から、私は、「かごめ かごめ」や「お月さん幾つ」の分析を行ってきたのであるが、本稿では、同じ視点に立って「姉さま遊び」という言葉の語義について考察したい。

いうまでもなく、「姉さま遊び」はママゴトの一つである。今日では、ママゴトはただ単に炊事と飲食についての模倣遊びと考えられているが、かつてママゴトと呼ばれた遊びには実に多様なものが含まれていた。柳田国男は、ママゴトの方言に着目することによって、その明確な分類を行い、この遊びの意義の解明に成功した。柳田は、昭和二年の「小さき者の声」でママゴトの二類型を提出し、昭和一六年の「こども風土記」でそれを発展させ、三類型とした。「こども風土記」は新聞に発表された雑文で分かりやすさを優先させた文章であるため、柳田の提出した分類は極めて緻密なものであるにも関わらずその意義は見逃されてきた。その成果を私なりに整理すると、ママゴトの類型は次の三つに整理できる^①。

① 施餓鬼行事に由来するもの

これは、年かさの少女たちによって家の外で行われた実際の煮炊き由来するママゴトである。こうした行事はもと村の公務であったと柳田は言う。その目的は、先祖祭りにおける外精霊の饗応にあった。

先祖祭りは、盆や正月、雛祭りなどの行事の際にこの世に戻ってくる霊に対する供食の祭りであるが、この時には先祖の霊以外の霊も帰ってくる。いわゆる外精霊である。それは、この世に帰ってきてても祭られてる者のいない淋しい霊であるから、誰かが正しくもてなす必要がある。そうでないと、彼らは大きな災厄を人々にもたらす。しかし、こうした

霊はけがれているため、その供食は先祖の霊を祭る役割をになう主婦が家の中ですることはできない。そのため、こうした饗応は未婚の少女たちによる家の外での煮炊きによって行われることになる。「ドント小屋」や「かまくら」などの、外で煮炊きと飲食をする風習はこうして生じた。やがて、こうした風習の意義が忘れられて、ママゴトとして残ったと、柳田国男はいうのである。

辻飯、門飯、ショウロウメシ、ボンクド、カラゴトなどの名称をもつ遊びは、こうした由来をもつママゴトである。

② 主婦権をもつ主婦のハレの日の働きぶりを模倣したものでこれに対し、もう一つのママゴトの系統がある。それは「主婦」の所作の模倣としてのママゴトである。

古く、日本の家族は大家族制であったから、一つの家・世帯の中にいて妻や母と呼ばれる女性がすべて「主婦」ではなかった。主婦権——俗な言葉で言えば、いわゆる「しゃもじ権」——をもった女性は、どんなに大きな家族でもたった一人しかいなかった。柳田国男が「オカタさま」と呼んだ女性である。

こうした女性は、食物の配分から行事全体の統括、そして家計の管理におよぶ、家政の全体にわたる強い権限を握っていた。オカタさまの予備軍であった小さな女の子は、そうしたオカタさまのハレの日ののかいがいしい働きぶりに目を見張り、憧れたと柳田国男は述べている。幼女たちは、そのハレの日の感興を長く記憶していて、常の日の遊びとした。それがママゴトのもう一つの起源だと柳田国男は主張するのである。

この系列に属するママゴトの方言には、三つの出自があった。

一、お客遊び・贈答に由来するもの：オコンバ（静岡）グハリアイ（徳島）、フルマエゴト（米沢）、クバリゴト（飛騨高山）

二、主婦の名に由来するもの：オカタサンゴト（奈良）、オカタボチ（宮城）、ジャジャボッコ（秋田）、オバコダチ（米沢）、オバサンゴト（中国地方）

三、炊事に由来するもの：バエバエゴク（火の燃える様、備前）、オミッチャゴ（水屋、下総）

いずれも、オカタさまの所作に由来するママゴトである。

③ 人形を使った育児遊び

この遊びは、アネサマゴト、アネサマアソビなどと呼ばれた。ママゴトの三類型のうち①と②の相違は、行為者の違いに基づくものである。すなわち、①はアネ（年かさの少女）の所作の模倣であり、②はオカタさま（主婦権をもつ女性）のそれに由来するのである。

柳田国男の三分類の特質は、①の類型が最も古いとしたこと、すなわちママゴトの神事起源説に立っていた点にある。

そして、三番目の類型は、②に人形が加わることによって生じたものと柳田はいう。つまり、柳田は人形遊びを②の系列の、主婦権をもつ女性の営みを模倣したママゴトの中に位置づけたのである。柳田のママゴトの分析はきわめて精密なものであったが、この最後の主張には疑問の余地がある。そこで、本稿では、柳田国男の「姉さま遊び」について見解の再検討を試みたい。

二 柳田説への疑問

柳田国男は、「こども風土記」の中で、姉さま遊びについて詳細に論じているが、その主張は次の三点に整理できる。

① 姉さま遊びのアネとは、新嫁のことである。

② 「姉さま人形」とは新嫁をかたどった人形のことである。

③ 姉さま人形の採用によって、ママゴトは食べる遊びでなく、育児あそび（姉さま遊び）へと移行した。

柳田は、姉さま遊びと、姉さま人形の結びつきを自明のことと考えていたようだが、彼の説は少なくとも以下の三点で、承伏しがたい。

第一点は、花嫁をかたどった人形は、昔も今も飾っておくことを目的としていることである。それは高価なお金を払って購入するもので、子どもが手に取って日常的な遊びに使用するものではない。

第二点は、いわゆる江戸時代から今日に至るまで「姉さま人形」と呼ばれる人形は、千代紙を折り畳んで作った成人の人形であるが、花嫁をかたどったものではないことである。この種の人形はお土産ものとして安価に売られることもあったが、基本的には手作りのものである。そして、その形態はハレの日の衣装ではなく、日々日用の着物を模したものであった。その意義は、少女が髪型と帯・着物のデザインの組み合わせを工夫して遊ぶためのもの、つまり着せ替え人形の一つであった。だから、姉さま人形のアネとは新嫁のことだという柳田説は、江戸期に広く普及していた「姉さま人形」の原型が花嫁人形だったという証拠が示さない限り非現実的な意見である。

花嫁をかたどった人形も、髪型と帯・着物の柄を組み合わせて遊ぶ人形も、ともに成人の女性を模した人形であるが、それは少女にとってはおこながれの対象であった。だから、それが少女たちにとって大人の女性のなかでもっとも魅力的だったアネの名を付して「姉さま人形」と呼ばれるにいたったことは容易に理解できる。

以上の考察から明かなことは、「姉さま人形」は成人の女性をかたどった人形だったという当然の事実である。しかし、姉さま遊びは育児ごっ

こであるから、その人形は成人ではなく幼児をかたどったものでなければならぬ。つまり、この遊びにおいて、最初に使用された人形が、「姉さま人形」のような成人の女性をかたどったものだったと考えることはきわめて不自然なのである。逆に、大人の人の時代の先行して、幼児をかたどった人形を使用した育児遊びの時代があったこと、そしてその時代がかなり長かったと考える方が、はるかに自然である。とすれば、「姉さま人形」の採用によって育児遊びが生じたという柳田説は、この点でも成り立たなくなる。

第三に、①と③はほとんど自明のことのように見えるが、この二つの主張は相矛盾している。①の仮説に立てば、姉さま遊びとは「アネを模倣した遊び」の意味であるから、アネはこのあそびの主体を指している。しかし、③では、姉さま遊びとは「姉さま人形を使った遊び」の短縮形であり、アネとは人形を指している。この場合、アネは遊びの対象つまり客体である。ひとつの遊びの中で主体と客体がアネという同一の名前で呼ばれることはあり得ないのであるから、①と③のふたつの主張は両立しない。

そこで人形を使った育児あそびが、なぜ「姉さま遊び」と呼ばれるようになったか、柳田国男とは異なる説明が必要となる。

三 「姉さま遊び」とは

「姉さま遊び」が、人形を使った育児あそびであることはまぎれもない事実である。しかし、かつての育児遊びの社会的意義は、今日われわれが想像するものとは大きく異なっていたと思われる。

今日の育児遊びは、様々な模倣遊びの一つに過ぎない真剣味のないも

のである。しかし、伝統的な社会のなかでは、育児遊びは今日よりはるかに真剣なものであった。というのは、近代以前の社会では、育児という労働の多くが母親の仕事ではなく、未婚の女性の分担だったからである。そして、赤ん坊の世話は、子守り奉公のような年かきの少女ばかりでなく、幼児自身が担当することも少なくはなかった。

幼児による幼児の世話は、日本だけでなく全世界的なものであった。こうした慣行は、東南アジアの農村地域に行けば今でも見られる。若い女性の労働力は農村に限らず伝統的な社会では貴重なものだったから、それを育児に振り向ける余裕は多くなかったのである。

こうした世界においては、育児遊びは単なる模倣遊びではあり得なかった。幼い少女にとって育児は弟や妹が生まれれば即座に自分が担当しなければならぬ重要な職分であったから、育児遊びはそのための必須の訓練だったのである。

こうした、育児遊びが何故「姉さま遊び」と呼ばれたのか。〈姉さま人形を使うから〉という柳田の論法は、成人女性の人形を使う以前の段階があったと想定すると成り立たない。

そこで「アネ」という言葉の意義が問題となるのであるが、この言葉には三つの意味がある。

- ① 嫂（あによめ）
 - ② キョウダイ関係の姉
 - ③ 小さな子供の世話係の少女
- ①と②も幼児の世話をしたが、親族関係のまったくない少女も③であれば、アネと呼ばれた。例えば柳田国男の青年期の恋歌「あこようにたへ」¹⁾に歌われているアネはこうした女性である。

あこよいざとくかの歌を
あねが教へしかのうたを
高くうたひてまきはせ
このたへがたき夕やみを

周知のように柳田国男には肉親の姉はいなかったから、ここで歌われているアネは、村の中で小さな子どもの世話と教育を担当していた少女たちである。アネは、単なる親族呼称にとどまらず長く敬称であった。かれらは、小なりといえども、村の中で子供の教育を担当する大事な役割をこなしていたからである。

少女に弟妹が生まれれば、彼女はその育児を担当し「アネ」と呼ばれる。小さい子の世話は容易ではないが、反面「アネ」となることは多くの少女にとって誇らしいことでもあっただろう。それに対し、末っ子や一人っ子でなかなか弟妹のできない少女は、アネになれず悔しい思いをすることになる。

しかし、そうした子供も、まわりにいる大人が人形を与えてやれば、アネになることができる。人形を対象に育児ごっこが可能になるからである。

このような人形は、アネでない少女をアネにし、アネとして遊ぶことを可能にするものであるから、ごく自然に「姉さま人形」と呼ばれるようになったと思われる。すなわち、姉さま人形の語源は、花オカタである兄嫁に由来するのではなく、幼児の養育係であったアネに由来するのである。そして、こうした遊びはアネでない子どもがアネの所作を真似するのであるから「姉さま遊び」と呼ばれるようになった。それは柳田の主張するような「姉さま人形を使った遊び」という意味ではなかった

のである。

以上の分析で得られた知見から、「姉さま遊び」とはアネでない少女がアネの模倣をする遊びであると一般化することができる。つまり、これまで、アネサマゴト、アネサマアソビという方言は人形を用いた遊びの呼称と考えられてきたが、それは原型において年かさの未婚の少女たちの所作の真似事すべてを含む名称だったと推測できるのである。

以上、姉さま遊びは、オカタさまではなく、年かさの少女の所作の小さな少女による模倣に由来するというのが、われわれの得た結論である。しかし、もうひとつの問題が残っている。柳田のママゴト研究の眼目は、ママゴトの原型のひとつ、すなわち、アネと呼ばれた少女たちの戸外での炊事・飲食の慣習は神事に由来するという主張にある。もしわれわれが、姉さま遊びの原型をアネの模倣に求めるなら、これと柳田のママゴトの神事起源説との論理的整合性が問題となる。

結論を一口で言うならば、私は、①の系列のママゴトの起源が神事にあるという柳田の見解には疑問をもつ。村の先祖祭り行事の時にだけ少女たちが戸外での炊事飲食を行ったと考えるのは不自然である。むしろ、その背後に、子ども達自身による大人の手を離れた日常的な炊事の風習があったと考えるべきである。私は小さな子どもだったころ武蔵野台地の上を駆け回って遊んでいたが、子ども達は戸外で様々な物を食べていた。大部分は生食だったが、芋やぬかなどはたき火で調理した。こうした自然発生的な飲食の風習を前提として、柳田のいう子ども達の施餓鬼行事も行われたのであろう。とすれば、ママゴトも、その原型である子どもたちによる戸外での炊事飲食の風習も、その起源が神事であると考えることはできなくなる。

こうした子どもたちの風習には、神事とは別の意義が求められるべきである。

注

- (1) 柳田国男のママゴトの二分類は、『定本柳田国男集』二〇巻 三七四―三七七頁（「小さき者の声」）に、三分類は 同集二二巻 三八―四八頁（「子ども風土記」）に述べられている。
- (2) 柳田は、①の類型がもっとも古いと明言している訳ではない。しかし「子ども風土記」の論述を綿密に読むと、彼が①をもっとも古い形態だと考えていたことは間違いないと思われる。
- (3) 『定本柳田国男集』二二巻 四七―四八頁
- (4) 「野辺の小草」三七―三八頁 『新編 柳田国男集』第一巻 筑摩書房 一九七八年